
光舞

++愛羅++

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光舞

【Nコード】

N9842A

【作者名】

++愛羅++

【あらすじ】

荒木裕はこの中学校で一番モテる中学2年生（14）。そして学校一の女たらしであった。友達が学校一とうわさされる美女・花道光舞を狙っているのをみて「俺も狙う」と断言する。軽い気持ちから光舞のあとをつけてみると・・・？切ないラブ・ストーリー。

第一話

光舞。

これが私の名前

でもこれはもう一人の私の名前。

「荒木君、これ食べない？」

「おお。サンキュウサンキュウ。」

荒木裕はこの中学校で一番モテる中学2年生（14）。

しかし裕は学校一の女たらしだった

「好きな人いねえんだもん。しょうがねえって！」

裕はこんなことでいつもごまかしていた。

「荒木君！今日は私のを食べてくれるんじゃないかった？」

「ゲッ・・・ま、いいじゃんか。一緒に食べようよ。」

「・・・（かつこいい・・・）・・・いいわよ。」

だから近づいてくる女子生徒も軽い人ばかりだったが。

「おいおい荒木ー。今日もモテてるねえ？」

「おかげさまで。」

「いいな。俺とか一回も告白されたことないんだぜ？」

「いつかはあるんじゃない？」

「ヘッ、お前の近くにいたる軽い女じゃなくてよー

俺はあの競争率の高い光舞にするよー！」

「誰？光舞。」

「知らねえの？」

花道光舞。男の歌舞伎役者のような名前だが、

この学校の生徒会長を勤めている。

気品のある顔立ち、おとなしげな性格。

この学校で一番美少女と言った方がふさわしいだろう。

「ほらっ、今日の前を通り過ぎた人だよ！」

確かに美少女だった。

「ふーん・・・よし。決めた。」

「なにをだよ。」

「俺、光舞って子を狙うよ。」

「はあ？」

・・・よく考えてみる。お前は、学校一有名な女たらしだぞ？

相手にされるか！」

「いや。今のでピンと来た。俺、あそこ狙う。」

裕は直感でこの人だと思った。

その直感がこの話の始まりだった。

第一話（後書き）

初めて小説を投稿する中2です。
見てくれてありがとうございます。

第二話

「ほんとかよー裕ー」

「なんだよ。まだいたのかお前。」

「やめといたほうがいいぞー？」

「うるせえ。俺が決めたんだよ。」

「でもお前【西中の女たらし】で有名だし・・・」

「これからやめるよ」

「光舞は3年生で一学年上だし・・・」

「愛に年は関係ないんだよ。（てきとう。）」

「でもー・・・」

「うるっさい！ー！ー！ー！ー！いいかげんにしやがれ阿呆が。」

「・・・」

荒木裕。今言われたとおりこの中学校「西中学校」の女たらしで有名。

ある日友達の弘に花道光舞という美女を紹介され

直感で「俺があの子を狙う」と思ったナルシストである。

「ねえ。裕。光舞は一度も男の人と話したことが無いんだって。」

「え．．．なにそれ。」

「あつ、光舞だっ．．．」

光舞は綺麗で長い黒髪を束ねない。

それが光舞に一番よくにあう髪型だからだ。

まつげが長く、そばにいた男はみんな振り向くほどだった。

「ふーん。やっぱりキレイだよな。」

「そうだね．．．」

「お前だつて狙ってるんじゃないかったのか？」

「冗談に決まってるじゃない。本気にするなつて。」

下校時間になりました。生徒はすみやかに．．．

構内のアナウンスが流れた。

「あつ、裕。俺、塾があるから！じゃあね！」

「ああ。じゃあな。」

裕の作戦はこうだった

1 まず生徒会長の光舞の後をつける

2 会長の光舞は学校の見回りをする。

3 終わった後にすぐに光舞に近づく。

4 光舞を口説く。

「カンペキだ！」

裕は絶対成功すると思っている。

誰も裕の誘いを断った子はいなかったからだ。

それほど荒木裕は美男子だったのだ。

光舞はすいすいと見回っている。

裕はコソコソと後をつけた。

光舞はふと音楽室で足を止めた。

鍵をかけるのかと思ったらそのまま中に入った。

(・・・？何をしているんだ・・・？)

裕はそう思いながらそつと音楽室をのぞいた。

もうすでに外は暗くなっていた

光舞は光る月を見つめながらしばらくそうしていた。

(なにしてるのかと思ったら。。光舞ってロマンチストかよ。そういうのもいいな)

すると突然。

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

裕はびっくりした。

光舞の体が急に変わったのだ。

アニメのようにピカーッと光ったわけでもない。

ぱっとかわったのだ。

髪^がの毛^がが．．．あの綺麗な黒髪^がが．．．

（銀色^がに変わ^つてる???!!!!!!）

第三話

光舞という名を聞いて

なぜかすぐ反応したんだ。

なぜなのかは自分でもわからない——・・・

「おい・・・裕。返事ぐらいしろよっ！裕——！」

「うん・・・」

「どうしたんだよ。暗いぞ？」

「うん・・・」

「・・・話聞いてないだろ・・・」

「うん……」

それを聞くと弘は怒ってほかのクラスへ走っていった。

荒木裕はため息をついて「聞いてたよ」とつぶやきながら

さっきと同じようにベランダのほうに向き直る。

座り込んで太陽に当たりながら

「あれはなんだったのだろうか」

と考えてばかりいた。

荒木裕（14）。学校一の美男子で学校一の女たらし。

今日はとても暖かい昼休みだ。

いつもこの時間は裕は約24人の彼女達といちゃついていただろう。

しかし、事の起こりは昨日の放課後だった。

親友・弘に紹介された美少女・花道光舞（15）を狙ってみせると
断言し

課後に待ち伏せして彼女にしようと思っていた

そっと教室をのぞいてみると。

彼女の髪の毛は銀色に変化していたのだ。

裕は驚いてそのまま逃げてしまったのだった。

「光舞は・・・きっと化け物なんだ・・・」

そう思い込んでいた。

しかし、変化していても光舞は光舞。やはり美人だった。

「・・・やっぱりもう一度見てみようか・・・」

裕はおさえきれない好奇心を弾ませながらベランダを出て、廊下を歩いた。

（あ！！！！！こ、光舞！！！！）

光舞は見回りをしていた。

（化け物ではなさそうな綺麗な人だな・・・）

裕は知らず知らずのうちに光舞に惚れていた。

そう。彼女が裕の初恋の人といえるだろう。

そのとたん、光舞と目が合った。

（やべっ）

裕はとっさに後ろを向いた。

しばらくそうしていた。

すると、さっきから髪の毛に何かの感触が当たった。

ジョキッ

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ・・・」

裕はびっくりして、後ろを振り向いた。

さっきまで20メートル先にいた光舞が裕の目の前にいる。

「ジョキッって・・・・・・・・・・ああ!!!!!!!!!!!!!!」

なんと、裕の髪の毛が切られている。

といつても、ほんの数センチだが。

「な・・・・・・・・何をす・・・」

「荒木裕、2年4組ですね？」

「・・・・・・・・（光舞がしゃべった!）・・・・・・・・・・は・・・・・・・・い・・・・・・・・」

「女たらしで有名ですよね。」

「え・・・・・・・・」

「気をつけたほうがよろしくてよ。愛を軽んじてはいけないわ。」

「へ？・・・・・・・・あ、はい・・・・・・・・」

「それに、この茶髪とピアスは校則違反。」

「・・・・・・・・」

「今度は髪の毛を切ったじゃすまないわよ？」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

そう言いおわると光舞は向きを変えて歩いていった。

「・・・・・・・・・・な・・・・・・・・・・なにあれ・・・・・・・・・・」

裕は心の底から驚いた。

「光舞が男の人にしゃべるのをみたのは裕が初めてだよ。」

「・・・・・・・・よつぽど悪く見えたんだね・・」

弘はそういつと笑った。

「怪物だからあんなに二重人格が出来るのか・・・・・・・・？（関係ない）」

「

今日の放課後も

裕は残るつもりだった

もちろん

断言したことを守るため——
・
・
・
・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9842a/>

光舞

2010年10月21日04時07分発行